

# 生成AI導入の「日本パラドックス」を突破せよ：活用を財務成果へ変える変革の羅針盤

## 生成AI導入の「Japan Paradox」

生成AIの活用・推進率



パラドックス：  
導入は進んでも「稼ぐ力」に  
結びついていない



グローバル水準  
(未着手・断念はわずか4%) (米国・英国と比較して極めて低い)

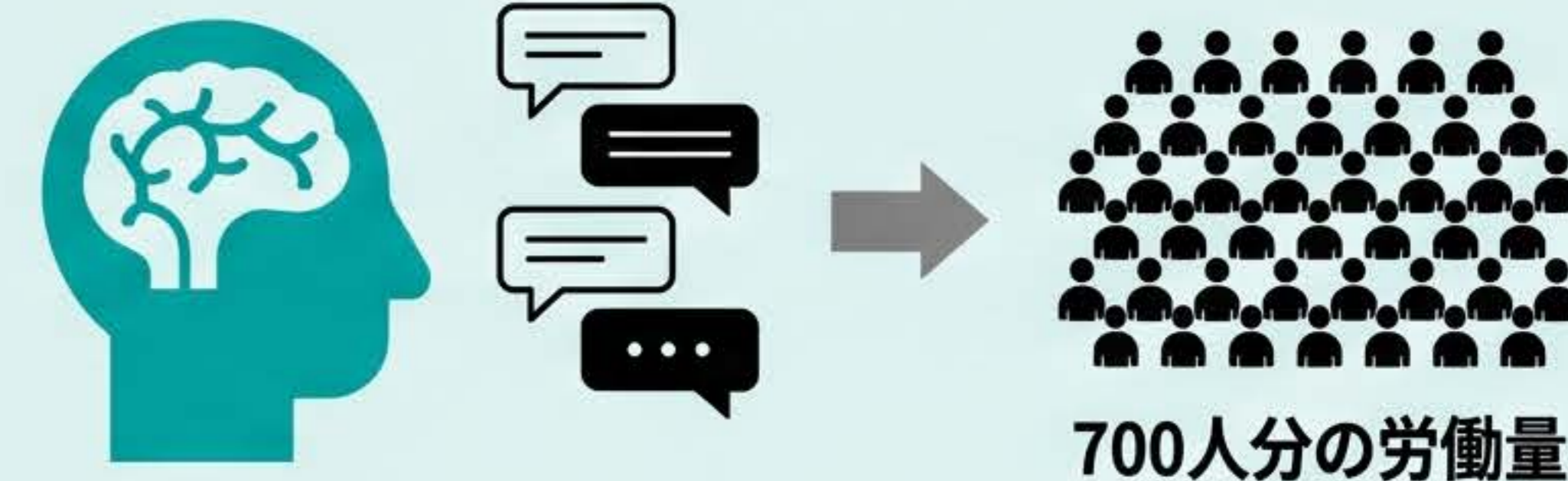
世界最下位

## 生成AIの活用状況と成果：主要6カ国比較

国名	活用・推進中の割合	期待を大きく上回る効果	成果の財務的還元
日本	87%	9%	40%
US	90%	38%	75%
UK	89%	32%	74%

※「期待を大きく上回る効果」を感じているのはわずか9% (効果測定システムの未整備)

## グローバル成功事例：Klarna（クラーナ）の衝撃



- 導入1カ月で年間4,000万ドルの利益改善予測
- AIがチャットの2/3（230万件）を自律処理

顧客解決時間：



## なぜ「理論上の効果」が消える？ 3つの構造的障壁



ITベンダー依存による  
「技術的知見の空洞化」  
システムがブラックボックス化し、アジリティと技術判断力が喪失



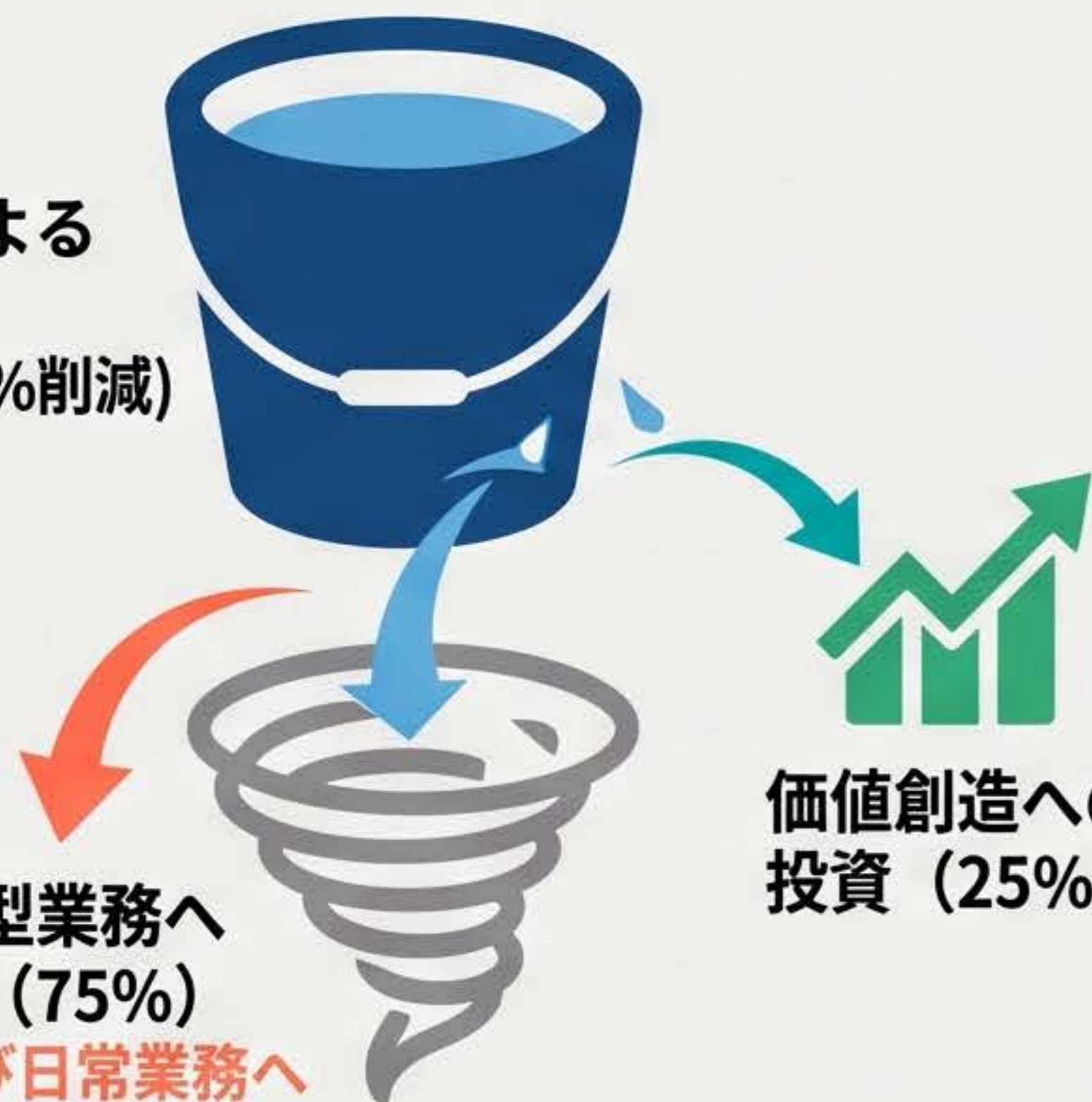
経営層と現場の  
「認識の乖離」  
現場「使い方が不明」vs  
経営層「適用イメージが湧かない」



「労働時間削減の罠」  
浮いた時間の61%が  
再び日常業務へ

## 「労働時間削減の罠」：浮いた時間の行方

生成AIによる  
時間削減  
(平均16.7%削減)



## 解決策：企業価値を向上させる「変革サイクル」

① AI Readiness (準備)  
ビジョンに基づく土台作り、ユースケース選定、AI-Readyなデータ整備、安全なガバナンス

② Evaluation (評価)  
ROIの厳格な設計、具体的指標（削減額・売上増加率）の設定、AI Canvas等の活用

③ Activation (還元・活性化)  
成果を実感へ、浮いた時間を「価値探索」へ再投資し、創出した利益を従業員へ還元、組織全体の变革意欲を爆発



【知財部門起点の戦略的高度化】

RAG技術等で知財業務を93.5%効率化し、「技術価値の判断者」へ進化（NEC事例）